

名古屋 文化情報

2014
3・4
March / April

No. 355
NAGOYA
Cultural
Information

特集 / 2013 年をふりかえって
おしらせ / 平成 25 年度名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞



2014

3・4

March / April

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2
 2013年をふりかえって…………… 3
 おしらせ…………… 9

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

「Monster(毛布)」

(2009年/紙にインク、水性クレヨン/40×31cm)

日常的ななんでもないものが、壁や身の周辺に映った影。変化や割合といった抽象的なことをグラフで示すように、シルエットで物が平面化する。

それは、その存在を、妄想やイメージという曖昧な映像のようになってしまう。

染谷 亜里可 (そめや ありか)

1961年 愛知県生まれ

2011年 「Table Canon」ケンジタキギャラリー(名古屋)

2011年 「Art in an Office」豊田市美術館

2013年 「ユーモアと飛躍」(*D.D.)岡崎市美術博物館

現在 「親子で楽しむアートの世界-遠まわりの旅」展(*D.D.)

名古屋市美術館(開催中~3月30日まで)

<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/tenrankai/2013/oyako/>

*今村哲とのアーティストユニット

「二〇一三年 名古屋市民文芸祭」
 (第六三回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
 詩の部 受賞作品

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市教育委員会賞◆

金城学院中学校二年

安部 和佳奈

雨の日

雨の日は

人数分のぬれた傘

隣り同志が気づかって

混み合うバスに

乗ってます

雨の中は

友だちとの会話が減っちゃって

混み合うバスも静かです

学校までの十五分

今日は長く感じます

2013

1年をふりかえって

洋舞 ▶ 長谷 義隆(中日新聞放送芸能部編集員)

2013年は国内外の一流バレエ団で、名古屋ゆかりの若手バレエダンサーたちの活躍が伝えられ、当地が俊英輩出の地であることが浮き彫りになった。

まず、世界屈指の名門、アメリカン・バレエ・シアター(本拠地ニューヨーク)に、三重県四日市市出身の小川華歩が正式入団し活動を始めた。日本人の入団は、ソリストとして活躍する名古屋市出身の加治屋百合子以来10年ぶり二人目。ドイツのミュンヘン国立バレエ団では、ジュニアカンパニー在籍の波多野渚砂=愛知県豊田市出身=が来季からの正式団員昇格を決めた。

国内では、新国立劇場バレエ団ソリストの米沢唯=名古屋市出身=がプリンシパルになり「次代を担うスターダンサー」として期待を集める。一方、熊川哲也率いる「Kバレエ」では、佐々部佳代が入団翌年早くもファースト・ソリストに昇格。秋の名古屋公演「白鳥の湖」で郷里に錦を飾った。

一方、松岡伶子バレエ団の主演を担った伊藤優花が花の盛りに惜しくも引退。こうしたプリマバレリーナの流出、引退で名古屋のバレエシーンの弱体化を懸念したが、無用の心配だった。

男女とも地元で新戦力が台頭したのである。オーディションで選ばれた若手が躍動した日本バレエ協会中部支部主催の「ドン・キホーテ」(2月)はその典型。主演キトリに選ばれた早矢仕友香は、松岡伶子バレエ団「ロミオとジュリエット」(12月)でも碓氷悠太とともに、咲いて散り急ぐ恋物語を好演した。

17歳の脇田紗也加が初役の大役を務めた豊田シティバレエ団「くるみ割り人形」(10月)、ジゼル初役の山本佳奈が心理の変化を的確な表現と動きで描き出した岡田純奈バレエ団



松岡伶子バレエ団「ロミオとジュリエット」(撮影:むらし和明)



三代舞踊団「武蔵 回顧-巖流島」の三代真史◎

「ジゼル」(11月)も印象深い。

創作バレエの分野で、質の高い作品が生まれた。芸術監督市川透がバレエ・ネクストのためにつくった「Swan Lake」(2月)は、古典「白鳥の湖」を骨格に、人間の善悪両面性を白鳥と黒鳥に置き換えて、内面の世界を幻想的に描いた。松本道子バレエ団とテアトル・ド・バレエカンパニーはストラビンスキーの「火の鳥」で創作競演し、あいちトリエンナーレ2013を盛り上げた(10月)。

川口節子は新作「ペトルーシュカ」(11月)で楽しげな情景の裏で起きている悲惨なドラマを描出。佐々智恵子バレエ団の神戸珠利は「レ・ミゼラブル」をもとにパリ民衆蜂起に殉じた群像劇バレエ「愛と革命」(11月)を手掛け、若手起用の妙を發揮した。

また、中部バレエ界大御所の越智実が米寿を祝い、故障に泣いたベテラン越智久美子が「白鳥の湖」(11月)の主演オデットに復帰。越智インターナショナルバレエは求心力を取り戻した。

創作ダンスでは、三代舞踊団は劇場を高級クラブに見立て、ジャズ黄金期のジャズダンスの熱気と歓喜を現代によみがえらせる一方、剣豪の境涯に迫る「武蔵 回顧-巖流島」(7、12月)で和魂洋才の新境地を見せた。現代舞踊は中堅が奮闘。石原弘恵「最後のRED」、石川雅実「薔薇が咲く庭」、倉知可英「鏡の中の…」、服部由香里「インプレッション」が印象深い。

なお石原が指導する至学館高校ダンス部は4月の世界大会で2部門制覇の快挙を成し遂げた。

舞踊界に貢献した平多宏之、松本吉正の両氏が他界した。

演劇 ▶ 安住 恭子(演劇評論家)

2013年は名古屋で、第2回「あいちトリエンナーレ」が開かれ、美術・造形作品の国際的な展示と共に、ベケットをゆるやかなテーマにしたパフォーマンスアート部門でも、内外からの先端作品を上演して注目を集めた。またその一環として地元の舞台表現者による「祝祭ウィーク」事業や、七ツ寺共同スタジオでの関連事業「COOL GAIA～ベケットの路地裏から～」なども開催された。ただ多くの演劇関係者は、こうした賑わいをよそに、独自の表現活動を地道に続けていたといえる。

中でも劇団あおきりみかんの作・演出家鹿目由紀の活躍と、劇団うりんこの劇団としての活発な活動が目立った。

まず鹿目由紀は、1年間で11本の作品創りに関わっている。そのうち劇団公演は2作品で、ほかの9作品は他劇団やさまざまなプロデュース公演だ。中には俳優館の『ブルーストッキングの女たち』(宮本研作、ふじたあさや演出、12月)のように、女優として出演しただけのものもあるが、ほとんどが作・演出作品で、その旺盛な創造力は注目に値する。そして実に多彩な側面を覗かせた。名古屋テレビ塔を活性化するためのイベント的公演(3月から4月の『迷子の部屋』と8月の『天国へのエレベーター』)もあれば、密室ミステリーの『鍵』(10月)、豊田市の子どもたちと創った『さよなら、魔法使い』(11月)や、俳優館の『どうぶつ会議』(脚本のみ、7月)のような児童劇もといった次第。



國語元年

そうした中で最も際立ったのは、名古屋市文化振興事業団のプロデュースで井上ひさしの戯曲に取り組んだ『國語元年』(演出のみ、9月)だ。明治の初めに共通語を創ることを巡る井上らしい重喜劇だが、鹿目は名古屋の多彩な劇団からの出演者達の個性を生かしながら、にぎやかな方言が飛び交うドラマを笑いのツボを心得て演出し、その裏にひそむ悲劇性も浮かび上がらせた。また、劇団公演の『サーカス家族』(6月)は、東京や仙台でも上演され、ジャグリングなどのピエロ芸も取り入れた演出で、話題になった。

一方劇団うりんこは、山崎清介や柴幸男、佃典彦ら先端で



罪と罰

活躍する作・演出家を積極的に起用して毎年新作を創っており、児童劇団の枠を超えた創作力で、大きな存在感を示している。そうした積み重ねによる演出や演技の洗練と、劇団としての充実ぶりが、13年には、『罪と罰』(山崎清介構成・演出、3月)として現れた。ほとんど舞台化されることのなかったドストエフスキーの小説に大胆に取り組み、魅力的な2時間余りの舞台に仕立てたのだ。省略の効いた脚本と躍動的な演出でスリリングに展開し、哲学的な内容もきちんと抑えながら、現代につながる作品として表現した。その力量は高く評価されている。また、その創造力は児童劇作品にも端的に表れ、まるで漫画のような『戦国クリスマス』(佃典彦作・演出、12月)や、立体絵本のような『だってだってのおばあさん』(西田豊子脚本・演出、同)など、多様な作品を生き生きと生み出した。

また、長年名古屋の小劇場演劇を牽引してきた北村想の仕事も充実していた。アベック・ピースの『あの、屋上のひと』(2月)は、現代人のさまざまな苦悩や悲しみと、それを乗り越えていくメッセージを発する作品。AK企画の『寿歌Ⅳ』(11月)も、リーディングとマリンバの演奏で、透徹した世界を創った。どちらも北村自身のかつての名作に連なる作品だが、演劇としての深みを持ちながら、3・11以降の日本の現実に根ざし、生き方そのものを問う内容。さらに、東京で上演した『グッド・バイ』(脚本のみ、12月)で、第17回鶴屋南北賞を受賞したことも含め、改めて劇作家としての力量を示した。

佃典彦、はせひろいち、鹿目由紀、平塚直隆らの劇作家協会東海支部も、全国規模のイベントを開催し、注目された。10年にわたって続けてきた、同支部プロデュースの「劇王」を、全国大会として実現させたのだ。これは短編戯曲を競い合う催しで、毎年長久手市文化の家での開催が注目を集め、今や全国各地に広がっている。その集大成としての全国大会で、北海道から九州までの16チームが参加し、レベルの高い上演合戦を繰り広げた。一定期間を置いて今後も全国大会を開催する予定で、期待させる。

洋楽 ▶ 早川 立大(音楽ジャーナリスト)

景気回復の掛け声が実感できない中、音楽現場を取り巻く苦しい環境に抗してなかなか見応え・聴き応えのある公演が多い1年だった。

まずは声楽。あいちトリエンナーレ2013の目玉となったブッチー二の名作オペラ『蝶々夫人』は愛知県文化振興事業団などの制作で、田尾下哲演出の舞台が輝き、蝶々さん役の安藤赴美子をディーヴァに押し上げた(9月14&16日、愛知県芸術劇場大ホール)。名古屋市文化振興事業団企画のオペレッタ『こうもり』がこれに次ぐ(2月22～24日、5公演、アートピアホール)。井原義則(アイゼンシュタイン)、日比野景(ロザリンデ)、加藤恵利子(アデーレ)といった主役級をはじめ脇役陣まで健闘し、軽妙な味わいを出した伊藤明子の演出とともに、ヨハン・シュトラウス二世の悦ばしい世界を描き出した。一方、名古屋二期会のロッシーニ『セヴィリアの理髪師』は広い愛知県芸術劇場大ホールの舞台をいっぱいに使って隙間を感じさせない出演者たちの歌唱・演技、中村敬一の見事な演出が光った(11月30日&12月1日)。名古屋二期会の最近のオペラ公演中1、2を争う水準に達していた。

しかし、最大の驚きはワーグナーの生誕200年を期して大作『パルジファル』がアマチュアのワーグナープロジェクト名古屋管弦楽団とモーツァルト200合唱団によって上演されたことだろう(8月25日、愛知県芸術劇場コンサートホール)。演奏会形式とはいえ、簡単な舞台装置や演技を加えた舞台は片寄純也(パルジファル)や清水華澄(クントリ)ら独唱陣の活躍もあって緊張感に満ち、2011年と2012年の名古屋マーラー音楽祭に続く、この地方のアマチュア音楽家たちの壮挙といって過言ではあるまい。

器楽ではオーケストラから。名古屋フィルハーモニー交響楽団では4月からイギリスの中堅マーティン・ブラピンズが第8代の常任指揮者に就任し、第404回定期公演でワーグナー・プログラムを振って就任記念を飾り(7月19&20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)、息つく間もなくブラームス・ツィクルスに着手、じっくりとした名演奏を聞かせた。定期公演400回を記念したマーラーの交響曲第3番は名誉指揮者モーシェ・アツモンの下で極上の名演となった(3月29&30日、同)。一方、セントラル愛知交響楽団は創設30周年を、2014年4月から音楽監督に就任するチェコの名匠レオシュ・スワロフスキーの指揮による記念コンサートで祝い(10月30日、同)、第130回定期公演では山本直純、野平一郎ら日本人作曲家の作品によるプログラムに意欲を見せた(11月

22日、しらかわホール)。

この1年で目立ったのは室内楽演奏会の充実ぶりだ。メンデルスゾーンの弦楽五重奏曲とブラームスの弦楽六重奏曲に実力をみせた「愛・知・芸術のもり弦楽五重奏団」とチェロの天野武子(3月7日、宗次ホール)、ラヴェルの室内楽全曲演奏をスタートさせたピアノの桑野郁子とヴァイオリンの古井麻美子(7月4日、ザ・コン



「パルジファル」(撮影:Motohiro Shibata)



「愛・知・芸術のもり弦楽五重奏団」

サートホール)、シューベルトの「アルパジオーネ・ソナタ」などをじっくりと歌い込んだチェロの中木健二(3月2日、宗次ホール)を挙げておこう。

宗次ホールにおけるピアノの吉永哲道(1月26日)とギターの谷辺昌央(10月5日)の各リサイタル、名古屋音楽ペンクラブ賞の受賞者たちによる「音環II」(9月27日、ザ・コンサートホール)も素晴らしい出来栄だった。

演出で扇ではなく木綿(ゆう)付櫛の持枝で神楽を優美に舞う。

2月、『青陽会』『藤戸』戦略機密の漏洩を恐れて漁夫の吾子を刺殺した佐々木盛綱(ワキ杉江 元)に「亡き子と同じ道に」と誌

能楽 ▶ 竹尾 邦太郎(能楽評論家)

1月3日、『名古屋能楽堂正月特別公演』注連を張った清々しい舞台上瑞気満ち、恒例の「翁」は観世流・清沢一政、謹直に勤める。能は「葛城・大和舞」久田三津子、清浄な雪の能を小書(特殊な)

め寄る老母(シテ松山幸親)が迫真なら、高圧的だったワキが事の一部始終を明かす重々しい語りが上々。漁夫ノ幽霊(後シテ)が刺殺されるに至る凄惨な場も凄み。

3月、『宝生会』「巴」内藤飛能、木曾義仲の最期に女ゆえ殉死を許されぬ憾みは、長刀捌きも颯爽と敵陣へ割って入る勢い。キリに義仲の遺品を双手に戴き面伏せる辺りの哀感沁々みせる。4月、『邦謡会能』「道成寺」梅田嘉宏、披巾の意気込み緊々と、眼目の乱拍子(小鼓・船戸昭弘)はポテンシャル・エネルギー(潜在する活動力)を徐々に沸点まで高め踏んでゆく気合、踏む度に蓄えられる鐘への執心。鐘入は烏帽子が脱げる奇禍も委細構わず、払い落す型だけきっぱり見せて綺麗に吸い込まれた。

5月、『やるまい会』「魚説法」、不在の住持に代り檀家(アド野村又三郎)の二親追善供養を執り行う新発意(シテ野村信朗)だが碌に経も読めず、海育ちで魚名に精通するをよいことに、それを連ねて説法らしく節を付け読み上げる横着。腥を忌む寺が何事、と激怒のアド、親子共演は役を楽しむシテが結構。

6月、『名古屋能楽堂六月定例公演』「砧」、夫の帰国を待ち侘びる妻(シテ長田 驥)の許に又も遅延の便り。不実を恨む心は内向し、砧の音に唐土の故事も想起され、益々狂おしくなる心情描写に老練の味。

『宝生会』「大江山」和久莊太郎、



名古屋能楽堂六月定例公演「砧」長田 驥(シテ)
(撮影:能楽写真家協会 杉浦 賢次)

邦舞・邦楽 ▶ 北島 徹也(中部日本放送)

「内田流創立 60 周年記念公演」(3/30 御園座)、今回、寿子が宗家に、有美が三代目家元を継承する披露の会で、寿子は「良寛さん」で枯淡と可愛らしさを表現、有美が『静と知盛』、また継承を表現した『内田の寿』を踊った。御園座はこの公演が昭和 38 年以來の現在の劇場の最終公演となった。「朱ざくら會」(5/3 芸術創造センター)で花柳朱実は『阿国風流』と『江戸の賑わい』を踊り、『江戸の賑わい』はメリハリが良かった。「長壽乃會」(5/11 市民会館)の長壽は満鶴と『喜撰』を抑えた動きだが熟達の素踊り。「朱ざくら會」、「長壽乃會」とともに、日本舞踊の楽しみ方、舞台裏などをレクチャー形式で紹介、長壽乃會は地方の歌詞を字幕で出した。いずれも日本舞

酒呑童子が源 頼光(ワキ飯富雅介)との一騎討ちに討たれて台を下り、よろよると頽れるところ無念さも一入。

7月、『お洒落名匠狂言会』「無布施経」佐藤友彦、お経を上げて帰るさい、お布施が出ず危惧するも体面上ずばり請求も出来ず躊躇苦慮する様子を巧みにみせる。

8月、『衣斐正宜後援会能』「富士太鼓」、宮中管絃会に召された太鼓の楽人・浅間、同業の富士が己れの技倆を待み上洛したのを疎み殺害。これを知らず富士ノ妻(シテ衣斐正宜)、夫を尋ね行き事を知り驚愕、形見の鳥兜・舞衣を着けると一気に昂る狂気、敵とばかりに太鼓を打つ辺り気魄十分。

9月、『名古屋能楽堂九月定例公演』「弓八幡」、石清水八幡宮参詣の勅使(ワキ杉江 元)に奉納の袋に入れた弓を托す老翁(シテ古橋正邦)、八幡の弓矢の由来を語り、弓は袋に剣は箱に納める事こそ泰平の世の證と。正に当代、武器(核)の保有は世界平和の為の抑止力でこそあれ戦争の道具ではないの警世の箴言、面白い。

10月、『久田観正会』「俊寛」久田勘鷗、鬼界が島に配流の三人、うち俊寛ひとりが赦免されなかった悲憤慷慨、憔悴の面に黒水衣・紺腰蓑の姿が内面に反映、哀切も殊更。

11月、『名古屋金春会』「熊坂」大盜熊坂長範ノ霊(シテ鬼頭尚久)、牛若丸に討たれた顛末を長刀捌きも大きく鮮やかに奮戦の姿をきびきび見せて痛快。

12月、『名古屋能楽堂十二月特別公演』「懐中髻」鹿島俊裕、髻入作法に暗いので明るい人に問えば弄ばれ、盃事のあとに出される物を懐に入れればよい、と教えられるが、いざ事に当面すれば引出物は弓。長い弓を懐中するのに苦心惨憺する姿が可笑しく、舅も悪戯っ気を出し「この所の慣い」と舞を所望すれば案山子よろしく不自由な恰好で舞うなど熟演。

朗報は竹市学氏の名古屋市文化振興事業団の第 29 回芸術創造賞受賞、悲報は筧鑛一氏(82)死去、謹んで御冥福をお祈りする。

踊に親しんでもらうための良い工夫と思う。「赤堀加鶴繪舞踊会」(6/2 市民会館)で、加鶴繪は『白露』と創作『渡美羅』を踊った。『渡美羅』は西域の幻影か、出会った女性の残像か、不思議な感覚が残る創作。五條園美は「五條流園美の会 オケ日舞披露演の会」(8/10 しらかわホール)でセントラル愛知交響楽団とのコラボレーションを小品集で試み、「珠園会」(8/25 中日劇場)では『夕涼み』と『夕立』を踊った。66 回となった「名古屋をどり」(9/5 ~ 10 中日劇場)、まずは数日間の舞踊興行を毎年開催する努力をねぎらいたい。公演前半が女性陣、後半が男性陣の素踊り『旅』が比較して興味深く、眼目の新作舞踊小芝居『御神木雷乃由来』は一昨年岡林信康が考案した「日



「ふたり華 鯉之巫・鯉娘舞踊リサイタル」

本民謡的なリズムに乗せた独自のロック（プログラムより）の「エンヤット」を音楽に起用しているが、「純舞踊でもなく、芝居でもなく、セリフと踊り」「音楽でつなぐ楽しい舞台」（右近プログラムより）という意図通り。「将来に続く舞踊公演の為に様々な取り組みに挑戦」（右近プログラムより）という意気込みに期待したい。「茂太郎女形二題」（10/13 北文化小劇場）は、西川茂太郎が名古屋演劇ペンクラブ賞受賞を記念して催し、『鐘ヶ岬』と江戸前のすっきりした出来の『吾妻八景』を踊り、アンコールの『さのさ』、『黒田節』、『さわぎ』が望外の面白さ。「竹内菊 米寿を舞う」（10/27 名古屋能楽堂）は菊自身の制作・演出・作舞で『梁塵秘抄』と『狐の嫁入り』の二題、『狐の嫁入り』は菊の「踊ってみたい」という衝動が形となってジャンルの違う出演者とともに迫力のある舞台。「ふたり華 鯉之巫・鯉娘舞踊リサイタル」（11/22 名古屋能楽堂）

は、本丸御殿再建を祝してと銘打った『尾張殿さま踊り』が話題となった。寛永12（1635）年初代尾張藩主・徳川義直が江戸城で将軍に御茶を献上、余興として披露した小姓の踊りに義直自身も加わって大評判となった時の記録『寛永跳記』に「かんえいおどり」に残る歌詞をもとに杵屋三太郎が作曲、鯉之巫と鯉娘が振り付けて、幻の踊りを再現した。鯉之巫の素踊り『越後獅子』、抽象的な表現もした創作舞踊『熊野恋慕抄』とともに高く評価され、名古屋市民芸術祭賞を得た。「稲垣流 豊美会」（11/23 名古屋能楽堂）は、舞比の『外記猿』が軽妙、友紀子の『千代の友鶴』はゆったりとした風格。「菊水会」（11/30 中日劇場）で菊次郎は、どこか柔らかく聴こえる常盤津がかえって似合う『八島』と心情まで表現された『お力』を踊った。

『長唄杵三会』（10/6 今池ガスホール）は20回を数える。名取のほか、三太郎が教える椋山女学園附属小学校の生徒の『外記猿』、はじめての三味線教室の『宝船』など裾野の広い出演、また、11月の「鯉之巫・鯉娘舞踊リサイタル」に先立ち、三太郎が古風に作曲した『尾張殿さま踊り』が試演を兼ねて初披露された。箏曲「横道正子と橋の会」（9/28 電気文化会館）は4年ぶりの演奏会で『道灌』など。箏曲正絃社は初代家元の三回忌として「野村正峰作品展」（10/18 しらかわホール）を催し、箏曲の創作、普及と発展に大きな足跡を残した正峰の作品『長城の賦』、『美吉野』、『遥かなりみちのく路』などが演奏され、名古屋市民芸術祭特別賞（企画賞）となった。正峰がめざした箏曲の新しい境地を改めて偲び、その作品が表現する美しい風景が感銘を与えた。国風音楽会は120年余の伝統の「生田祭箏曲定期演奏会」（10/6 中電ホール）ははじめ古格を守った演奏会を催した。

美術 ▶ 日沖 隆(美術批評)

2013年、あいちトリエンナーレは2度目の開催になった。「揺れる大地」という日本を襲った震災や津波、原発を問題意識として捉え、国際展らしいスケールの大きい映像とインスタレーションによるずしりと響く展示が散見された。原発が時代観と結びつくテーマとなるのは納得するが、自然の猛威というのは芸術のテーマとなりうるのか？ 一抹の疑念がぬぐえない。ともかく、時代を表現するためには地球規模の問題意識が避けられないことは確かだ。しかし、他の国際展との比較の間もなく、感動と納得が年々薄れているのは私だけか？ 作品過多の多様性からくる消化不良はぬぐえず、熟慮する時間と情報がない。

今回は発表されたほどの観客数のにぎわいは感じなかった。岡崎などには話題性もたらされたようで、地域の活性化を図る効果が継続開催につながればいい。今後の課題は、国際展を通じて日常の地道な芸術への関心をどう掘り起こしていくかだろう。

今年の美術館企画では、豊田市美術館の「フランシス・ベーコン展」と「反重力展」が印象深い。ベーコンの人間の顔と身体のゆ

がみ表現や、反重力の浮遊感は、現代人の存在の不確かさを浮かび上がらせて、今日の人間の状況を考えるにはいい企画だった。

また、古典絵画や近代絵画の美術ファンには、愛知県美術館企画の「フランス絵画300年・プーシキン美術館展」（4・5・6月）が好評価でにぎわいをみせ、感動を呼んでいた。この企画に先立って日本の伝統絵画の紹介もされていて、「円山応挙展」（愛知県美術館3-4月）の襖絵の展示には、大掛かりな空間の再現に工夫が凝らされていた。こうした西欧と日本の両面企画は、その差異に注目させ、グローバル時代にタイムリーな配慮である。

一方、名古屋市美術館の企画では、11～12月に開かれたハイレッド・センター：「直接行動」の軌跡展が出色だった。1960年代、日本に生まれた前衛活動の貴重な資料や作品は、美術の在り様や本質があいまいになる現在、近代から現代美術への推移を啓蒙する重要さを示していた。また、碧南市藤井達吉現代美術館の「石黒鏘二展」の鉄溶接、「高村光太郎展」の木彫が、改めて立体彫塑の魅力についての再評価を促していた。

ギャラリー展示を美術ジャンル別で見れば、仮説設置の手法では「栗本百合子」が白壁・榎木館の座敷と地下室を使って空間の異化と差異への意識を喚起し(3月)、「久野利博」がガレリア・フィナルテで大和的な垂直水平の静寂空間を実現して気を吐いた(6月)。また、名古屋画廊の「庄司達展」(9月)も確かな歩みを示し、なかでもケンジ・タキ・ギャラリーの「塩田千春展」は、鮮血のビデオドローイングや黒糸の密集作品などに深いインパクトを残していた(写真)。

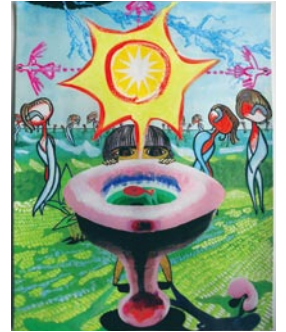
絵画とドローイングではギャラリーM(3月)「塚本智也展・光の色」のカラフルな浮遊感、STANDING PINEの「設楽知昭モレンスキーの大きなノート」と荒井理行、多田圭佑らの真摯な追及、ギャラリーHAMの「林良一ドローイング50」、「新美泰史展」などの作品が実験的であった。また前衛ではないが、名芳洞の「大谷真展」は魂の叫びを感じる個性的な世界を展開

していて、もっと多くの人に見てほしい(写真)。

版画で目についたのが、木版の「瀬川麻衣子展」(ギャラリー・ACS)の繊細な心象風景の情感、銅板/モノクロの「目良真弓展」(ギャラリー・アートグラフ)の衣服にまつわる記憶への心情などに、自己と対象の関係を深く掘り下げる感性が光っていた。



塩田千春展



大谷真展

文学 清水 良典(文芸評論家・愛知淑徳大学教授)

ノーベル文学賞の期待も年々高まっている村上春樹の、待望の新作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋)は、4月12日の発売後わずか一週間で百万部を突破するベストセラーとなったが、この長編小説の舞台は、なんと名古屋だったのである。村上春樹はかつて『地球のはぐれ方』という探訪記で名古屋を取り上げたことがあったが、それがこのように小説に活かされるとは全く思いがけない事件だった。市内の高校の仲の良い同級生5人のうち、1人だけ上京した多崎つくると、20歳のときに突然絶交されてしまう。その謎を解くために、16年ぶりに名古屋を訪れて友人たちを巡礼するという物語である。市内で育った者のほとんどが地元に進学し就職するという名古屋の地域色を、日本人にとっての魂



『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』
村上春樹著 文藝春秋刊

の故郷の暗部として描いたこの作品は、作者の名古屋に寄せる意外なほどの関心の深さを感じさせた。さらに作中人物の1人が勤務するレクサス店のモデルと思しい営業所に、全国から春樹ファンが押しかけるという珍事も起こった。

名古屋に縁の深いベテラン作家、吉田知子の選集が『I脳天壊了』『II日常的隣人』と2巻まで

刊行された(景文館書店)。今では本が手に入らず、こうして再び読めるようになるのはうれしい。出版したのが岡崎市出身のまだ若い編集者であることも喜ばしいことだ。芥川賞受賞以来、今日まで筆力は変わらず、特に最近では文芸雑誌に若手作家並みに作品を寄稿している。もっと尊敬され、読まれるべき作家である。

市内在住の若手作家もよい仕事をした。荻世いをらの『ピン・ザ・キャットの優雅な反乱』(河出書房新社)は、猫の介護と妻の出産育児を通して、東日本大震災以後の日本人の日常に浸透した不安を描いていたし、吉川トリコの『ふらりぶら子の恋』(幻冬舎)は自由で享乐的な生活の末の感情の揺らぎを自在のタッチで描いていた。また諏訪哲史の朝日新聞連載のエッセイをまとめた『スワ氏文集』は、漲るシュールなまでのユーモアが小説と対をなす彼の本質を表出していたといえる。

第26回中部ペンクラブ賞受賞作は、猿渡由美子の「風の訪れ」だった。突き放したパーソンの漂う作風は、非凡な浮遊感を漂わせていた。また第6回を迎えた「ショートストーリーなごや」の大賞は、大平菜衣子の『なごやの喫茶店』に決まった。ストレートなタイトルとは裏腹な、ひねりの利いた物語である。佳作となった丹羽一美の『ばあちゃんのパンツ』、加藤恵美子の『点の世界』の2作も、それぞれ遜色のない個性的な短編である。今回の入賞者3名はいずれも若い女性で、応募者の年齢層も年ごとに若くなっている。また同賞の映画化事業も、過去の作品が国際的に高く評価されるなど、若手映像作家の登竜門として反響を呼んでいる。さらに名古屋の文化を底上げする事業に成長してもらいたいと願う。



吉田知子選集II『日常的隣人』
吉田知子著 景文館書店

平成25年度 名古屋市芸術賞

平成25年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。芸術奨励賞は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、将来の活躍が期待され、名古屋の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術奨励賞

つつみ あつき 音楽【クラリネット】

名古屋市名東区在住



7歳よりクラリネットを小松孝文に師事する。昭和58(1983)年、オーストリア国立ウィーン舞台芸術音楽大学へ留学、元ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者シュミーデル教授に師事。在学中、ライムント歌劇場管弦楽団首席奏者、リゲティ木管五重奏団メンバーとして活躍し、オーストリア文化省最優秀ディプロマ賞を受賞。帰国後、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団日本公演への賛助出演や、「NHKFMフレッシュコンサート」、「アンサンブル・トゥデイ」公演への出演等にて、演奏家としての評価を高める。また、当地で活躍する演奏家と「モック木管五重奏団」「ヘッセン・トリオ」「JWE吹奏楽団」等数々のグループを結成し、精力的に

演奏活動を行っている。

平成17(2005)年からは、演奏家と作曲家の共同制作グループ「MiA」を結成し、音楽と文学、美術とを融合した作品に取り組むほか、俳優、作曲家とのコラボレーションによる総合舞台芸術作品も手掛けている。また、平成18(2006)年に開始した「つつみあつき・クラリネット・コンサート」の連続開催がこれまで50回を超え、人気を博している。さらに、平成23(2011)年からは、「夏休みまるまる一日子どもコンサート」を開催し、音楽劇、ミュージカル、バレエを取り入れた独創的な公演に取り組むなど、その活動は多岐に渡っており、今後更なる活躍が期待される。

あずみ きょうこ 安住 恭子 演劇【演劇評論】

名古屋市千種区在住



大学卒業後、出版社勤務を経て、昭和54(1979)年、中部読売新聞社(現読売新聞中部支社)に入社。社会部芸能担当記者として、演劇、映画、音楽等芸能全般の取材に当たり、演劇や映画の評論を行う。また、演劇専門誌の劇評執筆も数多く手掛け、中でも「演劇界」への執筆は昭和63(1988)年以来、現在まで続いている。

平成11(1999)年、読売新聞中部本社を退職後は、中日新聞、毎日新聞をはじめ、演劇専門誌において精力的に評論活動を行っている。また、脚本やプロデュースの分野においても、平成13(2001)年には「RASHOMON」(シアターコクーン、野村萬斎演出・主演)の脚本のほか、「ひそやかな家」(平成6(1994)年、愛知県文化振興

事業団)、「狂言—今日・幻・在の昔ばなし」(平成16(2004)年、名古屋市民芸術祭実行委員会)、「百人芝居◎真夜中の弥次さん喜多さん」(平成17(2005)年、KUDANProject)等、プロデュースを多数手掛ける。

著書も多く、平成24(2012)年には、夏目漱石の「草枕」におけるヒロインのモデルとされる人物の事績を丹念に取材し、その内容が評伝だけでなく文学研究にまで及んだ『草枕』の那美と辛亥革命(白水社)で第25回和辻哲郎文化賞を受賞した。さらに、静岡文化芸術大学や東海学園大学の講師を務めるなど、次世代の育成にも力を入れており、今後も更なる活躍が期待される。

いけやま なつこ 池山 奈都子 演劇【舞台演出】

北名古屋市在住



昭和56(1981)年、名古屋音楽大学卒業後、13年にわたりオペラ研究員として同大学に勤務。名古屋市文化振興事業団、名古屋二期会、名古屋オペラ協会等のオペラ・ミュージカル公演において数多くの演出家の助手を務めたほか、名古屋国際音楽祭、ローマ歌劇場日本公演等に演出助手として参加するなど、研鑽を重ねる。

平成4(1992)年、モンテヴェルディ作曲「オルフェオ」(大阪・静岡公演)で演出家デビューを果たした後も、当地のオペラや創作ミュージカルの公演をはじめ、津山国際音楽祭児童合唱団オペラ等、国内各地の公演での演出を多数手掛ける。また、日本舞踊の構成・

演出にも携わり、平成15(2003)年には、演出を担当した日本舞踊「一葉・大和楽に舞う」が伝統芸能の枠にとどまらない意欲的な作品として名古屋市民芸術祭賞を受賞するなど、その手腕が高く評価された。

平成18(2006)年から4年間、愛知県立芸術大学大学院の講師として後進の指導に携わるなど、次世代の育成にも熱心であり、平成22(2010)年からは、毎年鹿児島オペラ協会「名曲コンサート」等の演出、平成24(2012)年には西日本オペラ協会「アマデウスからの手紙」の演出等、活躍の場は国内各地に広がっており、今後も更なる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2013

名古屋市民芸術祭賞

名古屋市では、平成25年10月から11月の2ヶ月間にわたり、全23事業(主催事業3、参加公演20)に及ぶ「名古屋市民芸術祭2013」を開催しました。その参加公演20公演(音楽9、演劇4、舞踊3、伝統芸能4)の中から、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞(3公演)

演劇部門

劇団B級遊撃隊公演 満月ドリル



11月8日～10日 千種文化小劇場

ふたつの愛憎劇を軸として、「思い出」をキーワードに生者と死者の心象風景が交錯する物語を見事に表現した。また、舞台美術や照明も素晴らしく、円形劇場を巧みに使った演出も秀逸であった。小劇場演劇界ではベテラン作家ながら手慣れた手法に留まらず、果敢な挑戦を試みた台本も完成度が高く、観客の期待を裏切らない公演であった。

プロフィール | 86年：佃典彦・神谷尚吾らで結成
04年：第15回名古屋市民芸術祭賞受賞
06年：劇作家 佃典彦が第50回岸田國士戯曲賞受賞

舞踊部門

35周年記念川口節子バレエ団創作公演「舞浪漫 My Roman 2013」



11月9日～10日 芸術創造センター

母と娘の舞踊作家2人が、育てたダンサーたちの力を多彩に引き出し、創作バレエの饗宴ともいべき成果が現れた。特に新作の「ペトルーシュカ」は舞台美術、選曲とあいまって牧歌的な情景の中で展開する悲劇を描き出し、川口節子の美学が結実した。娘の太田一葉の小品集はバレエにポップな要素を取り込み、新感覚の舞踊作家として今後が期待される。

プロフィール | 78年：川口節子バレエスタジオ設立
98年：川口節子バレエ団に名称変更
03年：川口節子が東京新聞より優秀指導者賞受賞(同05年)
10年：川口節子が愛知県芸術文化選奨文化賞受賞

伝統芸能部門

ふたり華 鯉之丞・鯉娘 舞踊リサイタル



11月22日 名古屋能楽堂

新作と古典の舞踊を組み合わせ、鯉之丞と鯉娘が踊り切った極めて意欲的な公演であった。古記録にのみ残る幻の踊りを、考証に基づいて杵屋三太郎が作曲、鯉之丞と鯉娘が振付した「尾張殿さま踊り」は芸どころ名古屋の面目躍如であり、「越後獅子」は鯉之丞が持つ技量を遺憾なく発揮、日本舞踊の現代性を問うた作品「熊野恋慕抄」は構成と舞踊の完成度の高さが観客に感動を与えた。

プロフィール | 94年：西川鯉之丞、西川鯉娘でふたり華を結成、
(社)日本舞踊協会で大会賞受賞
96年：第1回ふたり華開催
05年：日本国際博覧会「愛・地球博」に出演

名古屋市芸術祭特別賞(3公演)

音楽部門 ベストアーティスト賞

窪田健志パーカッションリサイタルvol.2「原点からの想起」



10月21日 電気文化会館 ザ・コンサートホール

様々なパーカッションを卓越した技術と極めて高い集中力で演奏し、20世紀、21世紀の打楽器のオリジナル作品を種類の違うマレット、スティックを使い分けて、各楽器の限界まで表現した意欲的なリサイタルであった。今後もこのような挑戦を続けていく事を期待したい。

プロフィール 05年：小澤征爾音楽塾オペラ公演参加
07年：東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了
10年：名古屋フィルハーモニー交響楽団 打楽器奏者に就任
13年：名古屋フィルハーモニー交響楽団 首席打楽器奏者に就任

舞踊部門 奨励賞

Yoko Tsukamoto テアトル・ド・バレエ カンパニー公演 Next Spring



10月5日 愛知県芸術劇場 大ホール

新鋭、ベテランの座付き振付家2人による創作バレエ2本立て公演。新作の「OASIS」は東日本大震災に着想した意欲作だった。一方、「火の鳥」は、マイムを排して音符をすべて舞踊化してやまない振付家深川秀夫らしい秀作。群舞、主演級のダンサーたちの扱いが見事で、ダンサーたちの表現力も評価された。

プロフィール 80年：塚本洋子バレエ団設立
95年：創立15周年を契機とし、「ナゴヤ・テアトル・ド・バレエ団」設立
97年：日中友好25周年中国政府招致公演
98年：名古屋市民芸術祭賞受賞
04年：名古屋市民芸術祭賞受賞
09年：Yoko Tsukamoto テアトル・ド・バレエ カンパニーと改称
11年：名古屋市民芸術祭賞受賞

伝統芸能部門 企画賞

箏曲正絃社 野村正峰作品展



10月18日 三井住友海上 しらかわホール

箏曲演奏の普及と発展、多くの作品の創作、大きな団体の形成と運営、いずれにも大きな足跡を残した野村正峰の作品を、それを受け継ぐ箏曲正絃社が三回忌を機会にまとめて演奏した本公演の企画を高く評価する。野村正峰がめざした邦楽の新しい境地、美しい風景を表現した演奏は、まさに野村正峰へのオマージュといえよう。

プロフィール 53年：野村箏曲教室開設
65年：箏曲正絃社を創立
88年：愛知県文化選奨文化賞受賞
04年：初代野村正峰が名古屋市芸術特賞受賞

授賞式

名古屋市芸術賞、名古屋市民芸術祭賞の授賞式が下記のように開催されました。

日時 平成26年2月4日(火) 15:00

会場 名古屋市役所本庁舎5階 正庁



名古屋市芸術賞



名古屋市民芸術祭賞

名古屋市文化基金のご案内

感動を育てる種をまこう。

名古屋市では歴史と伝統を生かした個性豊かな市民文化の創造をめざしております。

名古屋市文化基金(名古屋市民文化振興事業積立基金)は、名古屋市と市民のみなさま並びに名古屋の文化を応援してくださるみなさまとが協力して基金を積み立てるものです。

この基金とその運用によって生まれる利息は、文化振興のための事業にあてられ、大きく役立てられています。

豊かな文化の創造は、人の心に感動を育み、心を豊かにするものと信じます。

基金の趣旨をご理解いただき、ぜひみなさまのご協力をお願い申し上げます。

みなさまからいただいた寄付金は
このような事業に活かされています

参加・交流

市民が参加し、交流できる事業を積極的に展開しています。

鑑賞

優れた舞台芸術を紹介しています。

支援・育成

市民が行う芸術文化活動を支援・育成しています。

情報発信

当地方の様々な文化情報を発信しています。



朗読劇



「写真 青木信二」
人形浄瑠璃「文案」



総合舞台芸術公演

■ ふるさと寄附金(納税)制度について

当基金にご寄附いただいた場合、ふるさと寄附金(納税)制度の適用対象となりますので、寄附金額2千円(適用下限額)を超える部分について、確定申告によって従来からの所得控除のほか、寄附金額5千円(適用下限額)を超える部分について、個人住民税からの税額控除を受けることができます。(名古屋市民の方が当基金にご寄附される場合も対象となります。)

問い合わせ 名古屋市民経済局文化振興室 TEL: 052-972-3172
公益財団法人名古屋市文化振興事業団 TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト

文化 基金

検索



感動を育てる種をまこう。
名古屋市文化基金

最高の瞬間を
鮮明な映像と音で
お届けします!
感動をハイビジョン・4K映像で表現

TVSnext

株式会社 ティーブイエスネクスト
〒460-0013 名古屋市中区上村津2丁目14番15号
TEL 052-322-6541 FAX 052-322-6638
http://www.tvs.co.jp

We make you move

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目9
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営